

第3回「道史編さんに関する有識者懇談会」議事録

日時：平成29年10月30日（月）10:00～10:45

場所：ホテルポールスター札幌 4階ラベンダー

【出席者】

<委員>

桑原委員、坂下委員、横井委員、山崎委員、小内委員、杉山委員、北野委員、小川委員、
辻副知事（座長）

<事務局>

（北海道）成田法務・法人局長、角張文書館長、鶴原首席文書専門員

成田法務・法人局長

定刻になりましたので、只今から第3回道史編さんに関する有識者懇談会を開催させていただきます。開会に当たりまして、主催者を代表いたしまして、辻副知事からご挨拶させていただきます。

辻副知事

副知事の辻でございます。本日はお忙しいところ、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。北海道150年となる来年度から道史の編さんを始めることになりまして、6月の末から第1回の有識者懇談会を開催させていただき、ちょうど4ヶ月が過ぎました。この間、委員の皆さま方から様々なご意見をいただいております。前回の「新北海道史」のあとの道史としてどうあるべきか、構成の問題を中心に、多くの貴重なご意見をいただきました。お陰様で、目指すべきところがだいぶ見えてまいりまして、新たな道史の全体像が、回を追うごとに定まってきたと考えているところでございます。

予定しておりました懇談会は、本日で最後という事になります。本日は、編さん大綱のほかに、刊行の形態や編さん組織などについてもさらにご議論いただくこととしております。これまで同様に、それぞれ専門的なお立場や幅広い知見をもとに、忌憚のないご意見をいただき、さらに充実した道史をめざしたいと考えております。

本日はよろしく申し上げます。

成田法務・法人局長

本日の懇談会の出席者についてですが、白木沢委員、瀬尾委員、柴田委員、富田委員、伊藤委員が所用により欠席となっております。また、道新の北野委員におかれましては、若干遅れるということでご連絡をいただいております。ここからは、座長の辻副知事が進行します。

辻座長

それでは、次第に沿って進めて参ります。本日の議題は3点あげています。最初の議題は、「道史編さん大綱（検討案）について」です。編さんの枠組みを定めた大綱ですけれども、前回お示したものを若干修正しておりますので、ご意見をいただきたいと思いません。まず、事務局から説明します。

靄原首席文書専門員

【資料1】をご覧ください。編さん大綱について、前回から内容的には大きな変更は加えておりません。ただ、今回はより完成形に近づけるために、表現を法制的に正しいものに整えています。第3（編さんの方針）は、前回お示ししたときは6項目からなっていましたが、重複する部分などもありましたので、整理してご覧の4つの項目にまとめております。また第4（道史の構成）のところで、通史編の巻数について、「程度」ということばを入れる提案をしていましたが、より限定的に、通史編1又は2巻という表現にしています。さらに裏面になります。第9（委任）と、附則を新たに加えています。以上が修正点の主なものです。

なお、今回参考資料として、現代史の対象となる戦後部分の略年表をつけております。戦後の流れをざっと思いで、現代史を編さんする上での視点、留意点など、何かお気づきのことがあれば、という意図で添付しております。説明は以上です。

辻座長

「道史編さん大綱（検討案）」について、今回第3、第4の修正点、さらには参考資料として略年表を付けたということです。どの部分からでも結構ですので、ご意見を賜りたいと思います。前回の懇談会では概ね妥当ということでしたけれども、何かご意見がありましたら、ご発言願います。

横井委員

全体としてはこの案で結構かと思っておりますが、1つ確認ですけれども、第4（道史の構成）のところで「現代史」と入れられていて、これは間違いはないのですが、現代史ということばがどこからどこまでを指すのかというところで、戦前から書き始めた方がいいというご意見も途中でありました。ここのメンバーの方は了解されていると思っておりますが、大綱とした場合の現代史の捉え方がいろいろになるといけないと思っておりますので、別のところで文章はいろいろ出るでしょうから、そういうものを見ていけばいいということか、もう少し限定付けを加えた方がいいのか、疑問というか感想を持ちました。

靄原首席文書専門員

第二次大戦後を主たる対象とする現代史を中心ということです。

横井委員

第二次大戦後ということで基本的によいのですが、「中心として」ということだから、多少のことは含まれているということによろしいということですね。

靄原首席文書専門員

パブリックコメントに添付する資料として、広い意味も含むという注記をつけて道民の皆さんに示していきたいと思っております。

山崎委員

前回申し上げたことの繰り返して恐縮ですが、もし様々な可能性があるとしたら、是非トピック型をベースにして英語版の作成というのをあらためてお願いしたいと思っております。

これから北海道の歴史や文化を、道民や国内の日本人だけではなくもっと広く発信していくということが必要になりますし、例えば道が海外の事務所を展開されてますときに、北海道はどういうところかということや道政の関連の中で紹介したりすることは、決して少なくはないはずです。そうしたこともあわせて、幅広い視点で是非前向きにご検討いただけたらありがたいということが1点。あと、これからの公表・刊行の仕方として、従来型を踏襲されてハードコピーの本ということで出されているわけですが、基本これで構いませんけれども、可能性があるのであれば、CD版・DVD版であるとか、あるいは道史・現代史をウェブサイトで載せるという形で狭く本に限らない形での公開・公表のあり方というのものは是非前向きに検討して頂けたらありがたいなと思っております。

辻座長

次の議題のところでもそうした話題について触れたいと思っておりましたが、まさに時代の流れの中で、どういう媒体でお見せしていくかが重要な観点だと思っておりますので、そういったところも踏まえながら今後検討していけたらと思っております。

他にご発言ございませんでしょうか。次の議題に入ってよろしいでしょうか。細かな文言も含めまして、大綱についてはパブリックコメント等でもご議論があると思っておりますので、このあたりについては検討されていくのではないかとと思っております。

続いて議題2の「道史の刊行形態」に移りたいとします。前回の懇談会では、「現代史」「概説書」「年表」という構成について皆さんのご賛同いただいたと思っておりますけれども、それぞれの中身については、専門の委員の方々によって、この先ご検討いただくような形になっていくと思っております。ここでは懇談会として、刊行のイメージをもう少し固めておきたいと思っております。今事務局から、たたき台について説明しますけれども、先ほど山崎先生からお話ありましたような観点も、今後視野におきながら、検討していきたいと思っております。まず事務局から説明します。

靄原首席文書専門員

【資料2】をご覧ください。現代史・概説書・年表の各刊行形態について、たたき台をお示ししております。まず現代史についてですが、書名の例として「北海道現代史」、体裁のA5判・上製本は、前回の「新北海道史」や他県史の典型です。各巻1000頁は、「新北海道史」が平均して1300頁近くありましたので、比較すると薄くなっています。最近の他県史は、むやみに厚くせず、扱いやすい1000頁前後に統一する傾向にあるようです。通史編は1巻または2巻とし、今後先生方に詳細に検討して頂きます。資料編3巻の内訳はご覧の分野別です。

次の概説書ですが、前回の懇談会では、「今までのような通史の単なる要約ではない、充実したものを」というご意見や、「楽しみだけれども、作業としてはかなり難しいのではないか」というご意見もいただけていました。今回の道史は、いかに充実した概説書を作るかということが、これまでになく重要になってくると思っております。

どのような概説書がよいのか、検討の一つの方法としまして、通史型・トピック型・図録型という、概説書によくある類型ごとに、刊行目的に照らしたときの適・不適を表にしてみました。

実際の例としてここに本を持ってきたのですが、これが前回の「新北海道史」で作られた概説です。歴史の教科書と同じように、古い時代から書いているものです。新潟県史の中では、このように「新潟県のあゆみ」というちょっとカラフルな体裁にして、先

史時代から順を追って1冊にまとめています。次のトピック型というのは最近よく書店で見かけるものですが、例えば「北海道の歴史がわかる本」ですね、項目を立ててその内容を示す、どこからでも読める、というようなものです。最近道史協から出された「北海道史事典」も、事典という名前は付いてますけれども、中身としては、興味深そうな項目を立てて、中で解説しているものです。図録を出している自治体も結構ありまして、これは静岡県史の中で出されている図録です。図録になるとちょっと判を大きくしまして、中に文書や資料写真などをふんだんに入れてまして、その分、文字はあまり多くありません。もう1つ例にあげている「北海道の歴史と文書」、これは文書館の開館記念誌ですが、これも図録型でして、文書類を大きく示して解説を加えています。

この3つの型以外にも、もっとほかにあるかもしれませんし、また複数の型を組み合わせた形もあるかと思います。どういったものがよいのかということに、ご意見をいただきたいと思います。その下の書名ですが、どれもあまり斬新さはありませんが例としてあげておきました。体裁ですが、一般の書店で多くの道民に気軽に買ってもらえるような、3つとも並製本、ソフトカバーにしています。またあまり事前の知識がない人でも、要点を押さえながら北海道の歴史をたどれる1巻とし、通史型やトピック型ならばA5判で500頁くらい、図録型ではA4まで大きくして、色刷りを多くして300頁くらいかと思います。

次の年表ですが、「新北海道史」では、資料編にあたる第9巻の、半分位を使いまして年表を掲載していました。さらに編さんが終わった8年後ですけれども、道内の出版社から「新北海道史年表」として、中身は一切変えていないんですけれども、少し小さい判で市販をされました。出典もついていて、信頼できるということで大変評判がよく、絶版となった今は古書店で高く売られているようなものです。今回の編さんでは、この増補改訂版つくるということになります。無償配付分は、現代史と同じ上製本の装幀で、また有償頒布の分は、多くの人に買ってもらえるよう並製本にして安価にという案になっています。

先ほど山崎先生の方からご意見のあった、CD版というのは、沖縄県では作られているそうなんですけれども、著作権の関係などで少し難しいところがあると聞いております。ただ「函館市史」では、ウェブサイト已全部載せまして、検索したときにヒットして使いやすい。函館市に聞きましたら、それほど経費はかけずにできたし、市民からの評判もよいと聞いています。これは全部出来上がってからのということになりますけれども、積極的に検討していきたいと思います。

以上のようなたたき台へのご感想やご意見、アイデアなどありましたら、ぜひお願いします。

辻座長

今事務局から説明がありましたけれども、「現代史」「概説書」「年表」、それから参考の手法について、どこからでも結構ですので、皆様のご意見を賜りたいと思います。ご発言をお願いします。

山崎委員

今ご説明いただいたところでございますけれども、すべてをCDあるいはウェブ版をやるというやり方もあるのかもしれませんが、例えば特に、かさばる現代史の資料編といったところをCDにするとか、臨機応変なやり方もあるのかなと思っていますので、そうい

ったところを含めてご検討いただけたらと思っっているところです。

辻座長

どうもありがとうございます。そのほか発言ございませんでしょうか。先ほど事務局の方からもいろいろな刊行形態について実例を示しながら説明がありましたが、やはり時代時代にあった形で、そして誰を相手にしているのかということも大切なことではないかと思ひます。海外の人に説明するという必要もすし、まずは子供達にとなれば、どういふふうに分かっていただくか、広く道民の方々に、それからいろいろな立場で北海道史を理解していただくことも大切だと思ひますので、いろいろなメディアがあればと思ひます。

横井委員

まだ十分理解できていないところがあつて、確認なんですけれども、先ほどの大綱の第4で、先史時代以降の歴史について叙述する概説というふうに書かれている。いま、資料2で話している概説書というのは、大綱のこの部分にあたるんですよね。そうすると、先史以降のところはかなり研究が進んでいて、新しい研究成果を取り入れなければならないという話をしていたと思うんですけれども、3つのうちのどれか1つを選ぶということで考えていいんでしょうか。図録型というのは、最新のものをに入れるのに、入れやすいのかどうか。いろいろな形のもの同時にできればよいのでしょうか。予算の関係もあるでしょうから、図録型がそういうことができるのかというと、難しそうな気がします。通史型にして、新しい成果を取り入れるというのが順当なやり方ではないかと思ひます。ただ、これは先史以降の研究の状況がよくわからないので、トピック型というのでもできるのかもしれない。私の感覚としては通史型になるのではないかなと、これは感想で、他の方にも聞きたいんですけれども。

靄原首席文書専門員

そうですね。新たな研究成果を盛り込むということでは、図録型は△にしておりますとおり、文字の部分が少なくなりますので、あまり十分な解説はできないのかと思ひます。何を重視するかというところで分かれてくる事だと思ひますし、通史方が一番いいとしても、例えば写真も中にたくさん入れてくるとか、トピック型ではないけれども、通史型の中にコラムのような形で注目してもらいたいことを出すとか、複合的な形もあり得るのかと思ひます。

坂下委員

2番目の概説書という言い方なんですけれども、一般的に考えると、1（現代史）があつて、その要約みたいな形に捉えられがちなので、もうちょっと違ふことばで表現された方がよいのではないかなという感じがしております。それと、通史型ではない場合には、中には高い能力のある方もいらっしゃるんですけれども、一般的にはかちかちの頭の人が多いので、少しそういうレイアウトも違ふ専門の方に一緒に入ってもらふことも必要ではないかと思ひます。通史型の場合はなんとかかなるかと思ひますが。

靄原首席文書専門員

出版社というか、編集のプロに、早めに契約して意見をもらいながら作るというのも一つの方法かなと考えておりました。

成田法務・法人局長

概説書という表現ですけれども、確かにどういうものを指しているのかわかりにくい部分があると思います。この表現については今後検討させていただきます。

辻座長

ほかにご発言ありませんか。刊行形態にいろいろな型があるということと、確かに概説書と言うと混同してしまうところがあるかと思しますので、そういったところは整理しておきたいと思えます。刊行の仕方についても、どういう順番でやっていくかということ、それからどんな内容にしていくかということ、事務的に進める場面でも、いろいろ相談していかなければいけないと考えておりますので、ご意見を伺いながら進めて参りたいと思えます。そのほかにご発言ありませんでしょうか。この件につきましては、今後専門会議を来年度予定しておりますので、先生方には詳細なご検討をお願いしたいと思っております。

続いて議題3に移ってよろしいでしょうか。議題3の「各編さん組織の構成」に移ります。道史の構成が少しずつ固まってきましたので、どういった組織構成で道史を作っていくか、ご意見をいただきたいと思えます。まず事務局から説明します。

靄原首席文書専門員

【資料3】をご覧ください。編さん組織の構成図を示しています。最上位の編さん組織が、重要事項を審議する「道史編さん会議」。その下の「道史編さん専門会議」と、さらにその下の各「部会」が、実際の編さん実務を担う組織です。今回、特にご検討いただきたいのは各「部会」のところですが、前回の懇談会では、「実働部隊である各部会の構成員が、どのような人数・体制になるかが最も重要」とのご指摘をいただきましたし、また「現代史と概説書・年表と、性格の違うものを同じ人がやるの大変」というご意見もありました。そこで、どのような部会の規模と構成でもって編さん作業が分担されるべきかを、図示してみました。まず、概説書と現代史を作る部会は、別々にしています。右側の現代史の部会ですが、資料編各巻ごとに3部会を立てて、それぞれ専門委員2名と調査執筆委員3名の構成としています。通史編は1部会で、基本的に資料編を担当した先生はほぼ参加していただいて、叙述を分担することになると思えます。

左側の概説書の部会ですが、基本的には、現代史と重ならない先生が専門委員・調査執筆委員になることを想定しています。ただ、概説書のうち戦後の部分を、現代史の一部の委員が執筆することはあるかと思えます。

この5つの部会はすべてが同時にスタートするわけではなく、刊行する時期に応じて、あとからスタートする部会もあります。刊行順の検討はこれからですけれども、仮に、現代史の資料編1・2・3のあと通史編を出して、10年目の最後の年に概説書と年表を出すということにいたしますと、次の【資料4】をご覧くださいんですけれども、だいたいこのような重なり具合で進んでいくことになろうかと思えます。そういったことも念頭に置きながら、部会構成についてご意見をいただければと思えます。

なお、年表につきましては、専門委員に方針を決めていただきましたら、あとは事務局のみで作成することとし、部会は立てていません。説明は以上です。

辻座長

それでは、各編さん組織の構成について、ご意見をいただきます。実際に作業を進めていく各部会の形は、今回初めてお示ししたわけですが、こういった組織構成で進めていくことについて、いかがでしょうか。ご発言をいただければと思います。

小内委員

各部会の専門委員と調査執筆委員の関係について、説明があったと思うんですが、どういう関係にあるかもう1度説明していただけますか。専門委員は執筆はしないのですか。

靄原首席文書専門員

専門委員は、編さん全体に対して責任を負っているような立場で、上の道史編さん専門会議には全部の専門委員の方に籍を置いて頂きまして、全体の調整も視野に入れながら、それぞれの部会も担当するという立場です。それに対して調査執筆委員は、担当する部会でその巻に対してだけ責任を負う立場で考えています。専門委員は調査・執筆・企画・調整を行う、調査執筆委員は調査と執筆を行う、という違いです。

辻座長

よろしいですか。その他、ご発言ございませんでしょうか。

横井委員

今資料3を話されていて、資料4も今話していいんでしょうか。資料4でわからなかったところは、全体としては少しずつ進めていくということで、事務局の体制の問題もあるんでしょうけれども、資料1・2・3が同時に始めていくということにはならないんですね。これは事務局の体制上の問題でずらしてあるのか。概説書や年表が最後の方に来るのはわかりますし、通史編が少し後になるというのは当然なんですけれども、資料編の1・2・3をずらすという理由ですね。一緒に同時に始めたらいんじゃないかと思えますけれども、そこはいかがなんでしょうか。

靄原首席文書専門員

これは1年目から同時に調査を始めているのですが、ただどちらかといえばゆっくりやる巻と、短期間にやらないといけないところとの差は出てくる。スタートは一緒に1年目からということですね。

横井委員

わかりました。掲載資料の選別というのが、資料編1の場合は2年目に入るんですけれども、資料2、資料3というのは1年ずつあとになると、ちょっとこの辺はわからなかったですね。調査は始まっているというのはわかったんですけれども。

靄原首席文書専門員

掲載資料の選別の時期をもっと早めてもよろしいと。

横井委員

どのくらいの体制で、どのくらいのスピードでやれるかわかりませんが、資料1の場合は2年目に掲載資料の選別や編目構成の決定をし、3年目に解説執筆を始めるということですね。資料2はその1年遅れ、資料3はさらにその1年遅れというふうにしている。調査は同時に始めるんだけれども、選別決定の作業というのを1年ずつずらしていくというその理由がちょっとよくわからなかった。

靄原首席文書専門員

事務局の体制としても、その前提として資料整理や筆耕などをやらないといけないものですから、それでちょっとずつずらした方が体制的には楽かなというところがあったのですが、選別は先生方がやられることですので、進み具合によって事務局もそれを追いかけてできれば、できるだけ前倒しで早い時期から進めるということはあっていいのかなと思います。まだこれについては本当に事務局だけで作ったたたき台のたたき台というもので、初めて先生方に見て頂いているものですので、じっくりこれから詰めていただいで、修正していただければと思います。

辻座長

事務局のマンパワーというところもあるんですけども、どの程度の体制でできるか、なるべく早めにやれるものはどんどんやっていくということもあるかと思えますし、そのあたりは十分御相談しながら進めていきたい。少しずつずれている理由が、マンパワーとか予算とかそちらの方の話も出て参りましたけれども、体制的にできるとなれば、こういったことはむしろ着実に集めて、他の作業にも移れるようなことになっていくのかなと。この辺も十分相談させていただければと思います。ありがとうございます。

そのほかご発言ありませんでしょうか。特にご意見がないようでしたら、この案に沿って編さん体制の準備を進めて参りたいと考えております。

それでは次の議題になりますけれども、「その他」ということで、この懇談会の後の予定について、事務局からお知らせしたいと思えます。

靄原首席文書専門員

今後、編さん開始までの、現在のところの予定をお知らせしたいと思えます。【資料3】の組織図の下に、組織関係と大綱関係とに分けて示しております。まず左側の編さん組織の関係ですけれども、専門委員をお願いする先生方に、各部会の構成員の推薦をお願いしまして、11月・12月で固めた後、1月から3月の間に、事務局から就任要請を行っていくというスケジュールで考えております。平成30年度に入りますと、4月の事務局設置後、できるだけ早く専門委員・調査執筆委員の委嘱手続きを行い、4月から5月には「道史編さん専門会議」と各「部会」を立ち上げて、それぞれ編さんのスタートが切れればと思っております。一方で、最上位の組織である「道史編さん会議」の委員の就任依頼も別に進めて、6月ころには、第1回道史編さん会議を開催したいと考えております。

次に右側の編さん大綱の関係ですが、11月上旬に「編さん大綱素案」、パブコメにかけるものを一般的に素案と言っているんですけども、その素案をまとめまして、12月上旬から1月上旬にかけて1ヶ月間パブリックコメントを実施いたします。その後、第一回定例道議会を経て、3月下旬に編さん大綱を正式決定する予定になっております。

辻座長

この件につきまして、何かご質問はございませんでしょうか。また、これまでいただいたご意見のほかに、付け加えた方がよいということや、新たなご意見など全体を通してご発言ございませんでしょうか。それでは、本日、全体を通してのご意見やご指摘を整理いたしまして、「道史編さん大綱」を固めてまいりたいと思います。また、編さん開始に向けた様々な準備も加速させていきたいと考えておりまして、この会議のあと、専門委員にご就任いただく先生方には、準備に向けた打合せをさせていただくことになっておりますので、よろしくお願いいたします。

これまで3回にわたり、道史編さんに関する有識者懇談会議を開催してまいりました。数々の貴重なご意見をいただきありがとうございます。お蔭をもちまして、この50年に1度の事業の骨格を方向づけることができましたことに、厚くお礼申し上げます。皆さま方には、来年度からの道史編さん会議の委員として、あるいはまた編さん業務の中核である専門委員として、引き続き道史編さんに関わっていただければと考えております。編さん業務、この成果物含めて、後世に誇れるような、価値ある道史の形で道民に届けられるよう、これからもお力添えをよろしくお願いいたします。

成田法務・法人局長

只今をもちまして、第3回道史編さんに関する有識者懇談会を閉会いたします。本日はありがとうございます。なお、専門委員にご就任いただく先生方につきましては、10分間の休憩後に、この場所で打合せを行いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(終了)